特23
70

明治十九年十月十四日内務省交付

代教育會

人情者

也

敬宇正直

歐米禮式序

交際ノ禮ハ親愛ト恭敬トヨリ發ス若シ此二者ニ發セス只ニ外形ニ止マルモノハ禮モ亦虛禮トナリ社會ノ交際自ラ敗ル是レ猶軍隊ノ猛卒アリ良將ナキガ如シ何トナレハ軍隊ニ豪邁勇銳ノ兵卒アリト雖モ良將ノ之ヲ率ルナクンハ則勝利ヲ全スルヲ得ス交際モ亦然リ座作進退往復饗應ノ禮アリト雖モ親愛恭敬ノ心ナクンハ則社會

ノ交際ヲ完スルヲ得ス況ヤ沐猴ニシテ冠スルカ如ク其本ヲ勤メスシテ其末ニ走ルモノ奚ソ能ク交際ヲ全フシ禮節ニ適ヲ得ンヤ何ヲカ其本ヲ勤メス末ニ走ルト謂フ曰ク禮ハ德義ノ實果ナリ夫レ根幹枝葉ノ培養充分ナル樹木ニ實ルノ果ト培養未タ至ラス枝葉委靡タルノ樹木ニ實ルノ果ト其形狀滋味如何ソヤ故ニ人ニシテ禮義ヲ調ヘントスレハ必先ツ自己ノ德義ト知識トヲ具備シ且ツ常ニ親愛恭敬ノ心ヲ存シ而シテ後ヲ座作進退音信往復饗應ノ格式ヲ學ヘキナリ若シ然ラスシテ猥リニ座作進退音信往復饗應等ノ格式ニ泥ム時ハ禮ハ則虛禮ニ流レ且ツ其分ヲ失ヒ宜キヲ得サルニ至ル是レ恰モ培養未タ至ラス枝葉委靡タルノ樹木ニ果實ノ美ナルヲ望ムカ如シ是レ之ヲ本ヲ勤メスシテ其末ニ走リ且ツ沐猴ニシテ冠スルモノト云フヘシ今

ヤ兒玉首藤二氏ノ西洋禮法書ヲ譯シ且ツ
增補セラルヽヲ見テ感最モ深シ之ヲ書シ
テ以テ序トス

野村彦四郎識ス

明治十九年八月念七日

凡例

一書中人名ニハ本邦人ノ姓名ニシテ音ノ稍々近キモノヲ以テ之ニ中ツ例之 Smith(スミス) ヲ清水ト シ Aster.(アスター) ヲ芦田トシタルノ類ナリ

一應對上ノ用語ヲ譯スルニ故ラニ平易ナル言辭ノ儘ヲ直載シタルハ交際ノ眞狀ヲ簡明ナラシメント欲スル耳

一「」ハ言辭ヲ直載シタルノ印トス

歐米禮式

米國 チェスターフィールド 原著
日本 首藤新三
兒玉利康 譯述增補

禮式の奥義を極めんと欲せば嚴ふ言語動作を慎しみ人ふ感發を起さしめ又ハ怒を抱らしむる樣の仕打なきことを注意し苟ふも粗忽の擧止あるべからず萬事一般と打ち開らき親切を旨とし一ふ至誠を以て交際を貫くこと肝要なり否らずんハ何程禮儀の規則ふ精しく明るくとも蓋し何の用とも爲さずして到底淑女縉士たるの体面を汚すことあるを免れざるへし左ハ順を追ひ表題を掲けて說示もところハ人間の交際ふ必要の禮式と社

會の常慣との大略なれゝ心を潛めて之を誦んじ機ゐ臨み變ゐ應して之を利用を爲す人あらば其の品格自ゝら高尚優美となりて社會の尊敬を受けんこと必せり

第一章　敬禮

一。途中ゐて知己の婦人ゐ出逢ふとき婦人の方ゐて我れゝ氣付ゝさる前ゐ我より敬禮を爲し又ゝ話掛くへゝらす尤も可成彼をして氣付ゝしむる樣の所置をなしさて婦人ゐ默禮を爲さゞ我れゝ帽を脫き又ゝ一寸之を頭より持上げて答禮すへし婦人ゝ紳士ゐ逢ふて默禮を爲すも爲さゝるも其の隨意なれとも婦人卿かゐても默禮と爲すとき紳士之ゐ答禮せさるゝ甚だしき失禮とするなり

二。途中又ゝ夜會宴會ゐとゐて友人ゐ出逢ふとき「ヤー後藤達者カー」("Ah, Godfrey, how d'ye do?")ゐゞゝ高聲を發して其名と呼ふへゝらす世ゐゝ他人の眼ゐ就き且つ名と知らるゝことを好まさるものゐるゆへ靜かゐ之ゐ近寄り可成小聲ゐて挨拶するを良しとす

三。敬禮の仕振ゝ人と場所と場合とゐよりて種々の別ゐり友人ゐ出逢ふときゝ握手を爲して健康の如何を問ひ深しく交らさる人ゐらゞ握手を爲さすして唯默禮もへし

四。何人より敬禮を受るも必ず之ゐ答禮すへし假令ひ敵視するものゐ對しても答禮を欠くときゝ自ら我か人物の野鄙なることを示すものと知るへし

五。平常の挨拶の言葉ゝ午前十一時頃までゝ「お早よふ」

(Good morning)と言ひ夫れより晩までの間に「今日に」(Good day)と言ひ夜に「今晩に」(Good evening)と言ひ寢室に退く時分又に夜中人と相分るゝに際して に「おやすみなさい」(Good night)と言ふへし

第二章

談話

一。談話の眞の目的に双方互に相慰め相樂むに在ることなるに間々此理を解せずして社會と以て爭論喧嘩の媒蠱の如く心得居るもの少なからず誠に嘆に堪しき次第にこそ都へて爭論に打勝つよりに寧ろ平穏の手段に依て交際する方世の人の氣受よく到底我が利益となるものなれに常に此心を以て談話を爲すべし

二。人と談話するときに如何なることあるも決して怒りの色を顯にすへからず是れ已が自重自若の良質なることを示すものにして一も利するところなさなり

三。人我れに對して怒りを示し我を罵詈するも決して之を怨むるの氣色を爲すへからず殊に我れも亦た立腹して罵詈の言を返すなどのことあるへからず我れ知らざる趣きにて之に應せるときに彼れの罵詈雜言に次第に止むものなり

四。高聲にて談話し又に高く笑聲を擧くへからず殊に婦人の音聲低く靜かならざるに頗る優美温柔の品格と下くるものとす

五。夜會宴會などの席に決して人と耳語すへからず道に極めて野鄙の風にして且つ他人へ對して此上もなき失

禮のことゝす內密の用事あらば必らず他室ゝ避けて談話すへし

六。會合の席ゝて我り友人を惡し樣ゝ言ふものあるも我れゝ話掛けられたる場合の外ゝ餘り其辨護を爲さゝると良しとす凡そ何人ゝても過失欠典いあるものゆへ彼れり友人を評する事と或ゝ其の當と得たるやも知るへからす且つ若し我れ彼れゝ向ふて反對の說を吐き友人を辨護せゝ彼ゝ必ず已り說を確めんとして種々の事を引出すべけれゝ遂ゝ暗やみの咀ゝて過こし得へき友人の過失欠典を明るみへ持出すり如き不都合を生する事とあるへし

七。衆人の前ゝて余り學問上の事を談話すへからす如何ゝも學者を氣取る樣ゝ見へて失禮なり

八。宗教政治等のことゝつき我れと說と異ふする人とゝ可成此等の点を議論することを避け當りさわりゝなき普通の談話を爲すへし

九。他人の談話を聞くときゝ面白く思ふ体を爲すを禮とす

十。知らさる人々の集りたる中ゝて物知り顔ゝ事を論すへからす隣席の人何程才智深く學識の秀でたる先生ゝ知るへからされ〻後ゝて笑を受くることあるへし

十一。談話の時分余り度々先方の名を呼掛くへからす「ソーデストモ本田君僕ゝ全く君と同說デス本田君」(*Beally, Mr. Hunter, I quite agree with you, Mr. Hunter.*)なゞ、言ふゝ隨分明苦しきもあり

十二。人々普通の世間話を爲し居るとき我れ己が職業上の談話を爲すべからず人々の中ゐ我が職業上の事ゐ明らかならざるもの多うるへければ假令ひ我れゐ面白しと思ひ話すことも彼ゐ取りてゐ左までの感覺なかるへし總へて談話なるものゐ我れ自ら樂む爲めゐわらもして他人を慰むる趣意のものゐあれゐ深く此邊ゐ注意すへきあり

十三。決して其場ゐ居合す人の友人を批評すへからす

十四。男子學識ゐある婦人と談話するときゐ可成婦人をして其才藝を顯ゐさしむる樣ゐ話しかくへし

十五。又通常の婦人ゐ談話するときゐ政治上學問上ゐとの六ケしき談話を止め可成平易ゐして面白きことを話す

へし

十六。衆人の前ゐて長談議を爲すへからす如何ゐ面白く微妙ゐ話も他人ゐ談話を爲すの機會を妨くるゆへよろしからす且つ他人一人りとして面白き談話を爲すものなきゆへ我れ之を爲して彼等を慰めんとの自慢心より斯く長き談話を爲すなちんとの疑を被るへし

十七。我ゐ子女の事を人ゐ話すゑ「謙次君ゐ」(*Mr. Henry*)又ゐ「お仙さんゐ」(*Miss. Jane*)ゐと、言ふべからす如何ゐも子女及ひ自分を高め言ふ如く見へて失禮なり

十八。婦人ゐ親友の前ゐわらされゐ其良人を「私の良人」(*My husband*)と言ふへからす必ず其姓を呼ひ「江藤氏」(*Mr. Efford*)か云々せりと言ふへし他人の前ゐて良人ゐ話掛るも矢張

其姓を呼ふへし

十九。決して他人の談話を中途ゐて遮きり止むへうらす是れはと失禮なるものゐなきなり

二十。小兒持の婦人ゐ己か小兒の養育方ゐつき自慢ゐ種々の事を話すへうらす是等ゐ如何ゐ自分ゐ而白きも他人ゐ却て迷惑ゐ思ふものなり

廿一。世ゐ無要の事を喋々喃々するものゐるゞ中ゐも人ゞ或る人の批評と爲す、を聞き之を告口するなゆゐ最も卑劣のことゆへ深く之をつゝしみ決して左の如き言を爲すへからす

「モシお登和さんお聞き遊ばせ西川のお半さんゐ種々貴嬢の樣ゐ足ゐの悪評を言ておいでおさいましたよアノ貴嬢の樣ゐ足ゐ

大きくて腕の痩せた方ゐ此邊ゐ座んすまいッて然して貴嬢のお体格の工合ゐ丸で鰐の樣てゐ頭部ゐ水牛ゐ宛然だッてお言ひなさいました」

"Well, Kate, how do you think Jane Smith says of you? She says you have the thickest ankles, and the thinnest matgaul arms of any girl in town— That your slap is like an aligator's, and your head resembles that of a bison."

廿二。又人の家を訪ふたるとき家内の風習。小兒の取扱方婢僕の使ひ樣。諸雑費。主婦の仕事身裝其外昨夜淫亭主ゞ晩く歸りたること迄一々氣をつけて聞取り見取り次ゐ行きたる家ゐてスッカリ之を併べ立る婦人ゐり誠ゐ嘆ゐし無作法の限りと申すへし若し世の人ゐ尊敬され社會ゐ相應の位地を占めんと思はゞ如何ゐる細事ゐても他人の

家内おて見受けたることを彼れ是れ批評すへからす

第三章

饗宴

一。晩餐饗應の招待ハ大抵豫め數日前ゟ爲すものとす。これハ口頭ゟて言送り又ハ招待狀と發すへし招待狀ハ左の例の如く可成簡單の辭を用ふるを禮とす

例

拜啓本月十九日(金曜日)於拙宅晩餐差上度同日午後六時迄ゟ御來車被下候樣願上候勿々

明治十九年九月十六日火曜日

芦田文之助殿　　清水龍人

Mr. Leopold Smith requests the pleasure fo your company at Dinner, on Tuesday, Sept. 16th, 1884.

Friday, the 19th. inst., at 6 c'clock.

B. Aster Esq.

二。夫婦兩人亭主とありて饗應を爲す場合ハ連名ゟて之を認め宛名も亦何某殿同夫人とすへし

三。招待を受けたる人ハ書面又ハ口頭ゟて必す速ゟゟ返答すへし返答書も亦簡單と要すること左の如し

拜啓來る金曜日の御饗宴ゟ預御招待難有了承仕候勿々

九月十七日水曜日　　清水龍人殿　　芦田文之助

Mr. Aster accepts with much pleasure Mr. Smith's invitation to dine with him on Friday.

Wednesday Sept. 17th.

四。招待ゐ應せさる場合ゐい左の如く認むへし

拜啓來る金曜日の夕饗宴ゐ預ニ御招待ニ御思召之程鳴謝仕候然る處無レ據差支有レ之乍ニ不本意ニ其節兼ニ罷出ニ候此段御斷申上候勿々

Mr. Aster returns thanks for your kind invitation for Friday, but regrets that circumstances will prevent his joining you on that occasion.

五。招待狀夫婦連名ゐて發したるものなるときい返書い必す細君ゐ宛名すへし

六。招待ゐ應せさるも決して禮儀を破る譯ゐていあらさ

るゆへ差支のあるゐ拘いらす無理ゐ承諾するゐ及いす但し一旦承諾する以上い非常の事あるゐあらされい必す時刻を違へす參會すへし

七。主人夫妻い一々來客ゐ迎接し之と導きて客室ゐ通し其入口ゐて是い何某君なりと其名と呼びて他の客人ゐ新來者の何人あるやと而し紹介と要する人ゐい一々紹介すへし

八。迎接の趣い可成簡單を勉めくだくしき無要の禮儀を避くへし數名の婦人同時ゐ入り來るときい年齡又い其他の点ゐて尊敬を要する婦人ゐ上席を與ふへし冬時ゐい暖爐ゐ近き處上席と知るへし

九。來客い先ッ其家の細君ゐ挨拶し而る後其他の人々ゐ

挨拶すへし

十。食事の用意整頓する旨の通知あるときハ主人ハ立ちて客人ハ向ひ食堂ハ赴かんことを乞ひ最上席ハ着かすへき婦人ハ左の腕を與へ之ハ寄掛らしめて食堂ハ導くへし主婦ハ來客中ハて紳士各々一名の貴婦人を導く樣ハ周旋し自ら先導者とありて食堂ハ入るへし但し食堂ハ進む順ハ、夫ある婦人獨身の婦人ハ先ち年長けたる婦人ハ年若き婦人ハ先つものとす○階梯を降りて食堂ハ赴く場合ハハ紳士壁の方即ち安全の側を婦人ハ讓るへし食堂ハ入りて紳士婦人の左りハ着席して萬事周旋介抱すへし

十一。主婦ハ「テーブル」の首席ハ着き主人ハ其末席ハ着くへし客人中の最上位たるへき紳士二名を主婦の左右ハ着

「紳士各々一名の貴婦人を導くべし」

"Each lady is to be conducted by a gentlemen"

席せしめ同様の婦人二名と主人の左右ゐ着席せしむへし但し殊ゐ或る紳士の爲ゐ設けたる饗宴あるときゝ其人を主婦の右ゐ着席せしむへし

十二。客ゐ着席せしむるゐゝ夫ゝ妻と離し且つ一家内の人々ゝ可成相離れしむへし這ゝ此等の人々ゝ其自宅ゐ於て互ゐ相親み充分談話を爲す機會ゐるゆへ此席ゐ於てゝ他人と談話することを好ましく思ふべけれゝなり又た紳士紳士と相併ひ婦人婦人と相隣りするゝ如きことなき様可成男女打混せて着席せしむへし

十三。髪を乱たし手顔ゐ垢付きたるまゝ爪垢の溜りたるまゝゐて「テーブル」に着くへからす「テーブル」ゐ着きたる後ゝ背ゐて椅子ゐ寄掛り脛を膝の上ゐ載せ又ゝ爪垢を掃除

し髪と梳き鼻垢を取り耳孔を堀り歯をほるなと野鄙なることを爲すへからす他人ゐ對して極めて失禮なるのみならず自ら我か下等の人物たることを示すものとす

十四。「テーブル」ゐつきたらゝ手布ゐ包みある麺包を取りて麺包皿の左の方ゐ置き手布をゝ膝の上ゐ布くへし

十五。主人は食物を盛り分る役目を爲すものなるゆへその順序ゝ先つ「ソップ」より始むべし是れゝ「ソップ」杓子一杯ゐて充分なり其他何品ゐよらす余り多量ゐ盛るゝ鄙しきこと、するあり而して盛りたる皿ゝ給仕人をして第一ゐ北の左ゐ着席せる婦人ゐ持行かしめ次きゝ右の婦人次きゐ左の紳士と順を追ふて配らしむへし

十六。客ゝ己れの前ゐ來りたる皿ゝ何品ゝよらす之を受

け隣人ゐ讓るなどの馬鹿禮式と爲すへからす

十七。「ソップ」を吸ふゐ音を起して口ゐ吸ひ込み又ゐ熱しとて吹くへからす若し熱くして靜かゐ吸ひ難きときゐ熱度の冷めるまで待ちて然るへし

十八。物を食するゐ音をさせ又ゐ舌打を爲し或ひゐ高き呼吸を爲す人ゐり極めて見苦しきものゐれゐ能く々々注意して之を謹むへし凡へて食事ゐ際してゐ「ナイフ」「フオーク」及ひ齒を塲合の許す限り靜かゐ持扱ふこと肝要と心得へし

十九。魚と食するゐゐ「フォーク」のみを用ひ決して「ナイフ」を用ゆへからす豌豆赤茄子「タート」「プデング」等ゐ「スプーン」ゐて食すへし是れ亦た「ナイフ」を用ゆへからす素と「ナイフ」

ゐ物を切るためゐ用ゆへき筈の道具なれゐ「スプーン」又ゐ「フォーク」よて事足る塲合ゐ可成「ナイフ」を用ひさるを良しとも云ふゐり

二十。麵包ゐ指ゐて裂き食すへし「ナイフ」ゐて切るへからす「バタ」を我か「ナイフ」ゐて取るゐ失禮なり別ゐ備へある「バタ」取ゐて取り麵包皿の緣ゐ付け然る後「ナイフ」ゐて麵包ゐ塗り食すへし

廿一。決して「ナイフ」ゐて食物を口ゐ運ぶへからす

廿二。「ソース」などを食物の上よりそゝき掛くへからも宜しく其傍ゐそゝぐべし

廿三。食し終るときゐ「ナイフ」「フォーク」を揃へて皿の上ゐ置き給仕人の之を取去るを待つへし

廿四。食事全く終り指洗水の出つるときハ手巾の角を氷ふ濕めし之ふて口を拭ひ然る後指を洗ふへし決して氷を口ふ含み漱をなすへからす

廿五。酒と強ひ薦められたるとき無法ふ斷るへからす若し飲むまとを好まさるならハ「コップ」ふ半分ほと受け唯た一寸と其緣ふ唇をつけたるまてふて宜しきあり

廿六。主人夫妻ハ食物又ハ酒を無理ふ強いすゝめ或ハ問ハすして「ハース」をそゝぎ掛けるなどのことと爲すへからす殊ふ強ひすゝむるハ最も卑むへき仕打なりと心得ゆへし

廿七。給仕人手先の汚きハ極めて見ふくきものゆへ白き手袋を用ひしむることふれとも是れハ余り好ましき次第

ふあらす一人毎ふ清潔なる手巾一枚を與へ之ふて指を隱し直接ふ指先と皿ふ觸れさる樣氣付けしむるを良しとするなり

廿八。食後茶又ハ珈琲を出すハ餘り取急かさるを法とす客人各々充分ふ酒を飲みたるを見斗らひさて之を命すへし然らされハ酒ふ客かなる樣ふてよろしからす

二十九。食事中給仕人誤て器物を破毀すも決して之ふ振向き又ハ其子細の詮索立てと爲すへからす

三十。給仕人間鈍るく又ハ無作法なるも公然之を言懲すへからす是れ益々其過失を明らかふして客人の不愉快を增すのみあり

第四章

訪問

一。上流社會ふてい唯た禮儀上のみの回訪を爲す風習あり故ふ貴婦人い一定の時期ふ其知己の婦人を回訪することを以て一の義務と心得居るなり此類の訪問ふい決して長居を爲さゝるものふて簡單ある談話を爲し大抵十分乃至十五分ふして立去るを禮とす

二。晝食の時刻より一時間前ふ回訪を終るべし。晝食の時刻い場所ふよりて同じからずと雖ども凡そ午後一時を通例とするゆへ朝九時より正午十二時までを以て回訪の時間と定むるを良しとす右の回訪を名けて朝間回訪（*Morning calls*）と云ふなり

三。訪問を爲し人の家ふ行きたるとき室内ふ飾付けある小細工物寶石類等ふ手を觸るべからず之を賞美するい可あれとも決して手を觸るへきものふあらず

四。先方の人不在なるときい必ず我が名刺を殘しをくべし若し名刺と所持せざるときは姓名を取次人ふ告げをくべし

五。訪問を受けたる人い客人の歸りふ臨みて其召使を呼び表戸を開かしむべし但し自ら送り出でゝ之を開くときい召使を呼ふ及むざれども自ら送り出でず又た召使を呼ばずして客をして手づから戸を明け歸らしむるい欠禮の甚だしきものとするあり

六。旅店ふ止宿中の人を訪ふときい先づ應接の間ふ扣へをりて其名刺を差出すべし但し親友の間柄ふて斯る角

張りたる禮儀と用ゆることなきなり

七。出產結婚其他芽出度事を祝するため訪問するゐゐ朝間回訪と同じく午前ゑ訪問し長居すべからず但し饗宴ゐ招待と受けたる場合ゐゐ此限ゐゐらず

八。旅行と爲し久しく不在とゐらんとする人友人を回訪して告別をなすの猶像なきとき「告別」(*T. T. L.* or "to take leave")と記せる封筒ゐ名刺を入れ之を配るべし歸鄉の時分ゐゐ友人の方より先づ我と訪問するを禮とす若し之と怠る友人あらば我より絶交するも妨あし

九。不幸ゑ逢ふたる人を訪問するゐゐ必ず一周間以内ゐ於てもべし殊ゐ友人の不幸ゐ逢ふたる時分ゐゐ決して訪問の禮を飲くべからず

十。懇信上の訪問ゐゐ別段嚴格ある規則あし蓋ゐ親族又ゐ親友の間柄ゐゐ互ゐ意中を知り合ふことゆゑ双方ゐ心地好き樣の擧止を爲すを以て足れりとすれべなり然し可成丈け言語動作をつゝしみ召使又ゐ小兒などの評をあし或ゐ家政向きの事ゐ就きて啄を容るべからず是等ゐ極めて先方の心地を惡しくするものなり

第五章　市街歩行

一。市街を歩行する時分ゐ茫然として友人ゐ行き過くるを知らざるあとのことあき樣注意すへし

二。友人ゐ出逢ふときゐ歩行と止めて握手の禮を爲すへし但し手套を取除くゐ及ゐす若し歩行と止むるの必要あ

きときに默禮と爲すか帽の緣に手を宛て又に「今日」に(Good day)の挨拶を爲すへし歩行を止めて談話を爲す場合には必ず街路の傍側に避け通行人の妨を爲さゝる樣注意すへし

三。友人我か知らさる人と同伴の時之と談話せんと欲せに先つ彼の人に向ふて其旨を斷るへし

四。立止りて友人と談話の最中之に別をも告げずして俄かに其場を去り他人と談話を爲すへからす

五。我か知らさる婦人と同伴する友人に出逢ふときに同時に兩人に敬禮するものとす但し婦人に對しては必ず帽を一寸と頭より持擧くへし右の婦人我か知るものなるときに先つ婦人に敬禮すへし

六。途中にて懇意の婦人に出逢ふときに直ちに脫帽の禮を爲すへし若し左まて懇意あらさる婦人あらに先方にて我れに氣の付くまで禮を爲すべからず

七。汚れたる手套を穿つときに其儘にて婦人と握手すべからず婦人の白き手套と汚すべきゆゑ極めて失禮とするなり

八。懇意の婦人に出逢ひ之と談話せんと欲するときに歩を廻して婦人の行く方に從ふべし決して立ち止るべからず

九。懇意の婦人紳士と同伴にて歩行するに出逢ふときに己れも亦た同伴の列に加るべからず

十。婦人と同伴にて歩行する時分には最も行作をつゝし

み丁寧親切わ之を取扱ふべし

十一。婦人わん街路の内側と歩行せしむべし若し外側の方却て安全なるときん位地と取替ゆべし

十二。婦人の安全若くん便利愉快の爲め必要の場合よん腕と出して之よ寄らしむべし

十三。夜間の歩行集會場の入口を昇降する時分おどわん必ず婦人をして腕わ寄らしむべし

十四。總べて何人と同伴わても必ず足並を揃へて歩行すべし又婦人若くん年長の人と同伴の時分わん歩行の速力を常わ彼と同樣わすべし

十五。婦人と同伴わて歩行するとき我か知らさる人婦人わ敬禮を爲さん婦人の爲わ之わ答禮すへし

十六。婦人と同伴わて歩行中婦人商店わ入らんことを欲するときん戸を開き婦人として先づ入らしむべし決して自ら先だち入るべからず若し不得止子細ありて我れ先だち入るときん其欠禮と謝し然る後入るべし

十七。紳士途中わて婦人わ進ひ事と問ひ掛けられたるときん帽を頭より持擧げて之わ返答すべし若し答ゆることを能んざるときん氣の毒なる旨を申述ぶべし

十八。婦人敷石の上を疾行するときん其裾を趾より一二寸上まで引擧げ衣裝の褶を右の手わて執り之を右の方わ引寄せながら歩むべし兩手わて衣裝を兩方わ引擧ぐるん野鄙の極なり

十九。坐敷の内わん着用すべき立派なる衣服を得憑顔わ

惜氣なく砂塵の上を引きずり歩く婦人あれども這い却て野鄙ゐ見ゆるものなり

第六章

紹介

一。人を紹介するハ頗る大切の事柄なれバ輕ろしく之を爲すべからず宜しく手形の裏書を爲すと等しく丁重ゐ心得べし

二。如何なる場合と雖ども先づ婦人の承諾を得ずして人を之ゐ紹介すべからず

三。友人の家ゐ他人を伴れ行くハ必ず先方の承諾を得たる上たるべし何ゆゑ斯く承諾を得ること必要なるやハ深く考ふるよ及バずして明なり譬へバ尋常の人物才學の優

れたる人ゐ近付くときハ其利する所多うるべしと雖ども右の才學優れたる方の人ハ奇説新論を聽き互ゐ思想を交換することの利なけれバ此の如き者と交際するを好まざるべきなり

四。友人の家ゐ於て可なりの人物と見ゆる人我れゐ近かんことを欲するの樣子あらバ假令ひ紹介の禮なきも之ゐ談話して不都合なかるべし彼れ友人の家ゐ在ること其の下賤の人物ゐあちざる証據なれバなり

五。決して珈琲茶屋などゐて樣々の人と交を結ぶべからず自ら我身を愛し重んずるものハ斯樣なることなきゆへ若し我れゐ近ゐんとする人あらバ其の品格推して知るべしとして之ハ親しまざるをよしとす

六。禮儀を守るハ尊敬を表す所以なり且つや禮儀を以て交際を開くときハ直打あき人ハ交りしことと悔ひ中ごろ絶交するが如き不体裁ハ陥ることなかるべし

七。一たび人と交と結ふ以上ハ彼ハ見逃すへらさる惡行あるわらされハ決して交と絶つことと得さるものと す但し不得止絶交せんとする場合ハハ常ハ之ハ接するハ空々しき默禮と以てもへし是れ毫しも禮儀と失ふことなくして次弟ハ親の度を減もるものあり

八。紹介と爲す時分ハハ上位の人の名と先きハ言ひ紳士と婦人とと引合するハハ婦人の名を先きハ言ひ左の如く紹介すへし

辨田貴嬢北條君と御引合せ申上けます」

辨田貴嬢北條君と御引合せ申上ます

"Miss. Pender, permit me to introduce Mr. Hodges."

"Miss. Pender, hermit me to introduce Mr. Hodges"

九。 年齢位地等同格の紳士同士又ハ婦人同士を引合するハ左の如く紹介すへし

「板倉君清水君と御知合ハなられとう御坐ります。清水君此方ゞ板倉君デ浮座ります」

"Mr. Douglas, allow me to make you acquainted with Mr. Smith; Mr Smith, Mr. Douglas."

十。 我か家族と他人ハ引合するハハ左の如く矢張り其姓と呼ふへし

「是れか私の父別府で浮座ります」

"My father, Mr. Kipp."

「是れか私の娘別府で浮座ります又ハ別府りエて浮座ります

"My daughter Miss. Kipp" or. "Miss. Lily Kipp."

「是れゝ別府妻て浮座ります」

"Mrs. Kipp."

十一。 紹介されたる人ハ互ハ握手するを例とす尤も握手するとせさるとハ上位地の人又ハ婦人の好みハ従ふものとす上位地の人又ハ婦人ハ於て手を差し出すときハ行儀を正ふして之ハ應すへきハ勿論あれとも先つ我より手を出すハ頗る傲慢ハ過き失禮なり○角張りたる紹介ハて双方互ハ少しく腰と屈め默禮を爲すへし

十二。 一時の知合となるハハ必しも紹介と要せす汽車或ハ乘合馬車中あとふて相隣りして席を占めなゝら紹介者

なきゝ爲め旅行と終るまで互ふ一言をも交へさるか如き馬鹿らしき躾屈の必要いなきなり

十三。婦人ゝ對して助力保護を要する場合ゝ於てゝ紹介なきか爲め之を差扣ゆるか如きことあるへからす宜しく帽を脱き禮と正ふして助力保護の承諾を乞ひ其用と終るときゝ默禮を爲し引退くへし

第七章

紹介狀

紹介狀ゝ商業用と交際用との二種あり友人商用ゝて遠方ゝ赴く時分ゝゝ其商用を達するゝ便なるか爲め其地ゝ於て知己を要することあるへし此場合ゝゝ左の如き紹介狀を與ふるなり

拜啓友人可兒善次氏此度舊倉木組商會跡引受人と取引之爲長崎港へ出發ゝ被レ及ゝ所御地ゝ於て知己無レ之由ニ付座ゝ得ゝ乍ニ卒爾一以ニ書面一貴殿へ付紹介ヤ上ゝ條付好意を以て御注意付助言被ニ成下一ゝゝ感佩の至付座ゝ恐惶謹言

明治十九年九月二十日於東京　劍田春治

福羽富之助様
足下

London, 20th. September, 1884.

Mr. Iom. S. Hooper.

Dear Sir;

The bearer of this is my friend, Mr. John Cunning, who goes to New York to effect a settlement with the consigness of the late firm of Gregory & Co. As he will be a stranger in your city, I have taken the liberty to introduce him to your notice, and any attentions or advice you may give him will be duly appreciated by,

Yours Respectfully,

Harry Kenderdine.

文て拜啓小生之儀重而拜面之上可申述候間何分御親友之儀宜敷御引合被下度此段御紹介旁如斯出用迄

明治十九年九月二十日於札幌

Washington, Sept. 20th, 1884.

Dear Sir,

The Bearer of this, Mr. John Cunning, an esteemed friend of mine, is about to visit Loudon for the first time, and will consepuently be a stranger in your metropolis. And attentions which you may extend to him

will be gratefully appreciated by

Your friend, and humble Servant.

Harry Kenderdine.

Hon. Tom. S. Hooper.

三。紹介狀持參人ハ到着の上先方の家を訪ひ紹介狀ヲ我か名刺と添へ差出すものとす名宛人ハ之を受取りて返訪と爲すか又ハ其名刺と贈るへし

四。紹介狀ハ認め與ふる人ヲて決し於て之を封緘すへからす持參人之と名宛人ヲ差出す時分ヲ封緘するあり

第八章

新年の回禮

一。一月一日ヲハ婦人在宅して十一時或ハ十二時頃より

夜の十時頃まて紳士の來訪祝賀を受るを禮とす但し美食と備へて饗應することなし大抵二三分間一すと簡單なる談話を爲すヲ過きす。家ヲよりてハ、談話數分以上ヨ亘り酒を出すことあり

二。紳士ハ大概二人或ハ三四人連れヲて連中の知り合なる婦人の宅を回訪し初めて婦人ヲ面會する人の爲ヲハ紹介を爲すなり

三。新年ハ婦人の配偶を撰むヲ最も屈強なる機會の一ヲして緑組の市場ヲ彷徨する少孃ハ各々畢生の裝飾を凝らし畢生の愛嬌を以て來客ヲ接するを例とす而して此時初めて普通の朋友となり中ごろ相愛の懇友とあり遂ヲ偕老の夫妻となるの例少ヲからさるあり

四。紹士婦人ハ紹介されて之と知合とあるも此類の交際い其場限りのものなれバ招待を受くるハあらされハ後日再び訪問すへうらす若し訪問を爲したく思ハヽ初めの紹介者ハ就き該夫人の承諾と得んことを依頼すへし

五。新年ハ限り婦人の接客振ハ頗る自由なるものゝして初對面の客人といえども久しく懇意ある人と同しく遠慮なく談話して差支なし則ち此時ハ限り嚴格の禮式を蹈む

と要せさるゝ故ハ内氣の少嬢ハ取りてハ此上もなき難有祭日ハして大抵平生の六ヵしき禮式振りハ引替へ如何ハも氣輕く見ゆるものなり是れ彼等の心中ハ禮式を蹈みはゝして人の笑を受けんことを恐るゝの憂なきゆへ自然と優美の天質と顯ハすハ至るなり

六。新年二日三日ハ婦人の返禮として回訪と爲す日なり

七。紹士又ハ婦人事故ありて回訪と爲さゝるとき又ハ遠方の友人ハ「恭賀新年」("A happy New Year." or "New Year Greeting.")と記せる名刺を配るへし

第九章　配偶の撰み様

一。男女年若き時分ハ總じて心浮き立ち易きものなれハ未た二十歳の年ハも滿たさる前ハ早や戀愛の交を爲さんことを思ふの例少なからす尤も斯くして早く結婚を爲し別ハ人ハ指さゝるゝ様の不都合もなく正しく世を通り過す少嬢少年なきハあらされとも此の如く芽出度きハ多からすして稀れハ見るところ素より一般の例証として

見ることゝ難し故に兎も角も早婚に伴ふ種々様々の害あるものとし之を謹み避ける方得策とこそ謂ふへけれ且つや人間配偶者の善悪如何に由て一生涯の間に限りなき楽と受くへく又限りなき悲を受くへきものにして實に婚姻に禍福昇り分けの階子段苦楽両岐の道去るべなれ桃か柿を買ふように何の苦もなく軽卒に仕遂けなば後に何程悔ひ悲むも臍まで口に届かさるなり

二。 総て二十歳以下にして結婚を望む男子に必ず世に交りたるくとなきものなるへけれに婦人社會の情態を知らす又た已か後來の事に就て熟考する程の力なきに蓋し當然の理數なり故に初めて年若き婦人に近くとき忽ち之を喜ひ慕ひ其者の身柄性質をつきて詳索を遂けるの暇なく直ちに

に之を娶りて我妻となし教育もあく才智もなき細君と長き年月を過こすの不愉快あるなり此人として若し前きに婦人社會に交際するの機會を有せしめに此の如き失策を爲すことなかるへし去れに適當の配偶を得んと欲せば先つ充分の交際を積むこと必要ありと知るへし

三。 男子に年齢二十五歳に達するまでに如何なることも結婚せさる決心にて交際社會に立入るへし左すれに適當の年齢に及んで自から充分の經驗を積み如何なる才智体力の婦人を撰まば能く己々生涯の配偶に適するやを發明すへし

四。 婦人に十九歳まで結婚せさるをよしとすさて此年齢に至りなに知已の紳士に己れに五歳乃至十歳年長の人

の中に就き我か良人とあすへきものを撰むへし

五。婦人若し浮氣振りたる性質にして情郎の生し易き恐れあり年齢相應の紳士の外に餘まり親密の交際を爲さゝるをよしとす左すれ若過きる良人を得るの危險あるへし

譯者曰 Lover に適中の譯語なきゆへ假りに情郎と譯すれとも我國の情郎とゝ大に其意味を異にせり抑も我國に於てゝ情郎又ゝ情婦なる語ゝ貴婦人紳士たるものゝ之を口にし耳にすることを恥る最下等の言葉なりゝ蓋ゝ所謂情郎情婦あるものゝ禮を知らす恥を知らさる淫奔猥褻の輩か門墻を越へ戸締りを破りて相結付く次第にして唯たゝ肉体の交を以て無上の快樂とのみ心得情を以て交り戯を以て交ることの樂とてゝ露はゝも辨へす遠慮なく其有樣を評すれゝ禽獸の仕打と謂ふも不可なき程ゆへ苟にも名譽を重んし倫理を尊ふ人々ゝ必ずや之を卑み嫌ゝさると得さるなり然れとも歐米文明國の風習ゝ全く之に反し情郎情婦ゝ即ち互に相愛敬する戀友にして共に談論して相樂み共に遊戯して相樂み其樂高尚にして且つ深遠あると同時に淫陋猥汚の行とてゝ更に卑く共に同室に伏すことすら婚姻の式を擧るまてゝ決して爲すことなし以下屢々情郎情婦なる語を用ゆれとも是に Lover 又は Sweetheart を無理に斯く譯せるものあれゝ其心して讀み玉へんことを伏して乞ふ

六。少年餘り早急に配偶と求むるときゝ間々恐ろしき騙

かしを出逢ふことあるものゆゑ能々注意すへし蓋し綠組の市場を持出されたる少嬢の中に夫の狙公の猿を似たるもの少からすして其母背後に在て綱を執り鞭を持ち足の蹈み様手の舞ひ様を指揮しさて思ひしき買客あると き初めて其綱と手離すなり未た婦人社會の交際に熟れすして只管配偶を撰むに汲々たる少年に大抵斯の如き喰せ物に買當るあり

七。男女の交際に熟し漸く是あらぬと思ふ適當の婦人を見出すに及ぶ如何なる手段に依らん社會の禮儀に背らすして能く該婦人の好意を買ふことを得るやを考ふるを以て肝要の順序とするあり

八。婦人に大抵氣敏く物に感し易きものゆへ男子ら已れと愛するの素振りあるを見ぬ容易く其心中を悟り得へし然れとも若し内氣にして且つ疑深き婦人に逢へは餘り急劇に其好意を買へんとせることなく行作禮式を正ふして之に交り常に其風致所好の如何に注意して之を恢ゑんことを勉むへし斯様の取扱を受るときは何程反對に決心せる婦人と雖とも大概は愛と返すものなり

九。已に配偶者と爲さんとの見込ありて或る婦人を丁寧に取扱ふ場合と雖とも決して他の婦人社會に對して義務禮式を欠くべからす左すれば假令ひ婦人の好意を失はんとの危險あるにもせよ此危險は社會の禮儀を欠きて紳士の体面を穢さんことは輕重相同しからざるなり

十。好意を買はんとする婦人に高價の贈り物を爲すへう

らす必す間接の機會ゐ依て小さき鮮美の品を贈り又い該婦人の讀むことを好むへき書籍を贈るへし

十一。既ゐ結婚の約調ひたるときい我身分ゐ相應する品物を贈るへし此場合と雖とも贈り物餘り其分ゐ過るとき い不節儉の人と思われ却てよろしからも且つ情郎として氣廣く親切ゐる人必すしも最上の良人とゐる譯ゐわらす婦人い皆之を知れり故ゐ能く此邊ゐ注意せされい其好意を買いんとして却て卑み嫌とるゝことあるへし

十二。情郎情婦い孰れも他ゐ其意中を打明かもへき人を要するものとす是れい大概異姓の人をよしとも即ち男子い已ゐ母姉又い年長の女友ゐ打明け婦人い其兄叔父又い中年ゐして既婚の男子ゐ其心事見込及ひ心配の廉等と打

明すべし

十三。婦人縉士と戀愛の交を爲さんとする前ゐい必す其親又い後見人の承諾を受くへきものとす父母と同居する場合ゐい娘子の舉動い一々其目ゐ留るへきを以て余り直なき男子と親密の交を爲さんとするの傾向あちい未た打娘子より言出さゝる前ゐ父母之を遮きり止むへし然れとも父母又い後見人と離れ居る場合ゐい此等のことなるへきゆへ殊ゐ承諾を得ること肝要なり此場合ゐい縉士婦人ゐ代て父母後見人の承諾を乞ふことあり

十四。男子い總て充分の判斷力を備ふるゐ至りたる後結婚すへき筈のものゆへ他人ゐ相談せすして決心することを得るとせり尤も未た社會ゐ於て獨立の位地と占めさる

内又ハ婦人の身分余リ我ヲ優リ過キ劣リ過ぎるときハ必ず先つ父母の承諾を得るを禮とす

十五。情郎情婦の間ヲ角芽立つ行進あらバ必ず婦人の方よて之を調和すへし過若し婦人ハあらば速ヤカニ之を謝し過若し男子の方ハあるも底意おく之を勘辨もへし婦人斯の如くハして從容大量を示さハ苟も男子の氣象あらんも其所爲ヲ感服せざるハなかるへし

十六。未婚の婦人獨リ男子ヲ伴なふて旅行すへからす既ヲ結婚の約調ひたる後ハ双方の間ヲハ禮儀を失したる廉ハなけれとも他人ハ此約束の事實を知らさるへけれハ之を怪み謗るものなしとせす故ヲ他ヲ一名の婦人を伴なふをよしとするなり

十七。男女互ヲ熟考の上か又ハ久しく交際する後ヲ取結ひたる約束ハ之を解くの必要あるか如きハと稀なり然れとも若し不幸ヲして誤て不滿足の約束を爲すことあらバ斷然之と解約すへし一旦結婚を爲す以上ハ容易く相離るヽことを得ざるものなり○解約するヲハ往復の書翰及び贈り物等ハ總て互ヲ返却すへし

第十章　結婚

一。婚禮の日取ハ婦人の方ヲて定むるを法とす故ヲ男子ハ萬端の手順と悉く婦人ヲ打任すをよしとするヲり且つ婦人ヲハ種々の都合あるものゆへ決して強て吉例を擧るを取急ぐべからず

婚姻の正禮

The proper ceremony of wedding.

二。結婚の約と爲したる婦人ハ男子ヲ交際するヲ就き深く注意すること肝要あり否らざれバ情郎の猜疑を被り思ハざる不幸ヲ逢フの危險あるべし

三。結婚の約調ふたる後ハ婦人其情郎ヲあらざる男子と共ヲ劇場又ハ夜會其他總て快樂の場所へ赴くべからず尤も兄又ハ叔父の如き最近の親族ならハ差支なきも情郎の許可なくして他の男子と同行するハ非常の不都合とするなり

四。新婦の親族より用意する嫁入道具ハ大抵衣類其他日用必需の「シーツ」「テーブルクロース」等とす父家富有なるときハ家屋及ひ器具類と添ゆることあり

五。寶玉類ハ嫁入道具の中ヲ入らす是れハ新郎より婦人

を贈るあり

六。友人より新婦への贈り物は新婦の身に就く飾り品化粧室に屬する品物又は家内に必需の物品等すべて有用のものたるべし或は衣服を贈るものあれども其色合新婦の意に適ふや否や知れがたきゆへ衣服を贈ることは見合すをよしとす

七。旅行の裝束にて倉卒に婚姻の禮式と濟まし直ちに汽車又は汽船に乘込みて旅行する婦人あれども這は正式にあらざるなり。新婦は白色の衣服を着け白色の面被を蒙り橙花の髪飾を戴くべし而して儀式を終り友人の祝賀を受けたる後は如何に取急きて旅行服に着更へ直ちに旅行の途に上るも差支なることとなし差し倹約の点より旅行服

の儀にて儀式を擧けんとするならば決して多人數と招待することなく式場に列せしむるは唯だ親密の友人數名のみに限るべし

八。新郎は上着「ズボン」「チョッキ」とも皆な黑色のものを用ゆべし

九。新婦附添女は新婦の姉妹朋友にて勤むるものにて人員は限りなし右附添女は揃ひの白色の衣服を着け且つ橙花の髪飾を戴くべし

十。婚姻の賀宴ある場合には宴の終るまで新婦着更へをあすへらす宴終りて後旅行服に更へ出發すべし

十一。新夫婦出立の後其名刺と婚禮菓子(Wedding cake)を數多の友人に贈るなり但し名刺には婦宅の日取を記し友人の

來賀ゐ便するものとす○右の名刺及び菓子ハ遠方の友人と雖とも必ず之を贈るを例とす尤も數百里を隔てたる友人ゐハ菓子を略し名刺のみと郵便ふて贈るも可あり

十二。新婚禮後初めて會合の席ゐ列するときゐハ橙花と以て髪を飾るへきものとす

十三。新夫婦ハ一箇年間丈けハ其宅ゐ於て宴會を開くふ及ハされとも其後ゐ至れハ最早や例外と見做さるゝとあく矢張り他人通り宴會の報酬を爲さゝるを得す

第十一章　舞蹈

一。夜會ハ於て舞蹈を爲す時分ゐハ白色又ハ玉子色の手套を穿め暇時も之を取除くへからす但し食卓ゐ就くときハ之を取除くへし手套の儘ゐて食事するハと失禮のものハなきなり

二。紳士ハ貴婦人ゐ向ふて我か舞の相手とあり呉れるや否や(*If she vill do you the favor to dance with you*)を問ふへし婦人若し他ゐ相手ゐある旨を斷らハ何時ゑろ手すきとなりて我と舞ふことを得るやを問ふへし

三。婦人紳士ゐ相手を望まれたるとき明了の理由あらハ之を斷ることを得且つ後ゐ他の紳士の言掛を承諾するとを得るなり然れとも唯た根もなき毛嫌ひか又ハ他ゐ一すと愛し好む紳士あるゑ爲ゐ最初の人を斷り次の人を承諾するハ如何ゑも最初の人を侮り踏付けたる擧動ふて此上もなき失禮と知るへし

四。縉士 Quadrilles(舞蹈の名)の舞ゐ立つ時分おい我組米た鄰ふ順番ょ至らすして他組の舞ひ終るを待つ間と雖とも相手の婦人親密のものゐあらされい決して之と談話すへらす

五。舞蹈ゐ不熟練のもの誤を爲すとき之を告け示すい可あれとも激へ導く如き樣子を爲すい頗る失禮とす

六。縉士相手の婦人を強く引き又い餘り手と固く握るへからす成可しとやりゐ之を導く工合ょするを良しとす

七。舞蹈の順序足蹈の心得なきものい決して立ちあがり舞はんとすることおかれ

八。舞蹈い腰より下のみを動うして靜うゐ舞ふものゐて床を蹴り又い跳ね廻り又い全身と振りまはもおどのとと

を爲すべからず

九。如何ゐ熟練なりとて余り足蹈を是れ見よがしゐ立派ふするときい舞蹈の師匠と見進へらるべきゆへ大抵のところを度とするをよしとす

十。Waltz の舞を爲す時分ゐい輕く手掌ふて婦人の腰ょさはり居るべし決して強く推すべからず

十一。縉士婦人ゐ舞蹈の相手を求めたるとき婦人免るされたき旨を斷り後ゐ他の縉士と舞ふごときことあるも縉士い之ゐ氣付うざる面色ゐて見過すをよしとす決して其所爲と立腹すべからず何となれば婦人我れゐ斷りたりとて強ち我を卑しみ嫌ふたる次第ゐていあるまじく他ゐ好む人ある故なるべければなり凡そ婦人の擧動を左右する

彈金の力だけ測り知りがたきものゝなく白綢子の上着の中ゐゝ種々樣々ゐ赤く燃へ立つ思の隱れ居るものなれば嚴ゐ正格の規則を蹈ませ難き場合ゐるなり且つ婦人をして何人の求めゐも突合ひ已が快樂の爲めとてゝ遂よ一度として舞ふことを得さらしむるゝ頗る殘酷ゐ過るものと謂ふべし

十二。我れ婦人ゐ向ひ我か相手とならんことを求めたるとき婦人他ゐ相手ある旨を答へ後の何番目ゐ我か相手とならんことを約束せゞ必す其時の來ることゐ注意すべし茫然として時の來るゐ氣付かす又ゝ婦人ゐ對して粗略の取扱ゐらゝ如何ゐも婦人を侮り戲れ其上他人の相手となるを妨けたる如く見なて失禮此上もゐき所爲とゐるなり

十三。舞蹈終るときゝ紳士婦人を元の席ゐ導き腰を屈めて禮を爲し謝辭と述ふへし婦人ゝ之ゐ對して亦た腰と屈め默禮すへし

十四。夜會の亭主ゝ婦人皆な舞ひ唯た壁の掛物となるか爲めのみゐ折角來會せるか如きものなき樣周施盡力すへし

十五。婦人度々舞ふも婦して之を他の稀れゐ舞ひ又ゝ少しも舞ゝさる婦人ゐ對して誘るへからす此の如き場合ゐゝ內密ゐ知已の紳士ゐ勸めて有の不幸なる婦人と舞ゝしひへし

十六。夜會と催したる家の人々即ち子息娘か余り度々舞ふときゝ禮法と知らさるものとして人の嗤笑を受くへし

十七。其家の婦人ハ舞蹈ヲ於て他の婦人の好む位地を占めさるを禮とす且つ可成舞蹈と爲さすして會衆の接待ヲ注意すへし○家の紳士ハ既婚の婦人及ひ舞蹈を爲さゝる人々の接待ヲ注意すること肝要あり

十八。舞蹈會ヲ妻を伴ふときハ之と相手ヲて舞ふへうらす但し最初一度丈けハ左まて不都合あしと雖とも可成之を避るをよしとす

十九。食事の時刻來るときハ紳士婦人を食堂ヲ導き其傍らヲ着席して萬事介抱周旋を爲し食事終らハ再ひ舞蹈室ヲ伴ふへし

二十。紳士舞蹈室ヲて婦人ヲ紹介さるゝも此の如き交際ハ其場限りのものヲして更ヲ正式の紹介あき以上ハ其後

再ひ出逢ふ場合あるも決して該婦人ヲ向て挨拶を爲すへうす

廿一。舞蹈室ヲ於て喧嘩口論と爲すへうらさるは勿論聊かヲても怒氣又ハ怨恨の色を示すへからす間違事ハ總て外ヲ出て丶片付るを法とするなり

廿二。假令婦人ヲ對して失禮を爲すものあるも殊更ら之を見出して譴責するなと差し出ゲましきことを爲さゝるを良しとす婦人ハ此の如き場合ヨ保護を受け衆人の目ヲつくことを好まさるのみあらす大抵自ら他の平穏の手段ヲ依て失禮者と服することを得るものゆへ我ゲ所爲を見て却て迷惑ヲ思ふへし

廿三。舞蹈會ヲて友人ヲ出合ふときハ一度挨拶と爲せハ

充分なり度々頭を下け腰を屈める人われども這い頻る見苦しきものあり

廿四。散會前ゐ立去らんと欲せい何人ゐも挨拶せす竊ゐ抜け出るを良しとす他人ゐ氣付かれすして爲し得るゐわちされい其家の細君ゐも挨拶すへらす若し諸人ゐ挨拶を爲すときい先方も亦た答禮を要するゆゑ大ゐ快樂の妨を爲すものなり

第十二章　旅行

一。都て旅行を爲す時分ゐい何人ゐても大抵我儘ゐなり勝のものゐて已れさへ都合よけれい他の旅人の愉快不愉快ゐい毫しも注意せさること頗る多し停車場ゐて切符と

買ふとき互ゐ押合ひ汽車の中又い集會の場所ゐて其席を爭ひ甚たしきい已れの好む席を得んゝ爲め婦人を押除けるゐと女性ゐ對して失禮を爲すゐとゐり實ゐ苦々しき次第と謂ふべし

二。滊車又い乘合馬車等ゐ乘込むときい決して他人ゐ斟酌なしゐ已れのみ心地能き位地と占むること勿れ殊ゐ婦人ゐ對してい充分の禮儀と盡さゝるべらす

三。汽車中ゐ於て風の吹き入ること我ゐ心地能く便利なりとて他の乘客ゐ不便利となり又い其健康を害するゞ如きことあらば決して車窓を開くべらす旅行中ゐい種々の不愉快い免れざるものと心得互ゐ忍び合ふことと禮と

するなり

四。車中の心地能き位地に素と婦人に屬するものゆへ必ず之に上席を讓るへし但し既に着席の後婦人入り來り此婦人紳士と同伴なるときに立て席を讓るに及ばざれども婦人獨りにて入り來り良席皆な塞がり居り且つ我に同伴の婦人なき場合に猶豫なく立て之に席を讓るべし○婦人我が臨席に着うんとする場合に直ちに立て二席の内其好みに從ふて撰み着うしむべし

五。車中の交際に其場限りにして下車の時分消滅するものとす故に左まで人と懇意の談話を爲すに及ばず、人我れに話しうくるときに行儀を正ふして之に應答すべし彼れ若し好ましうらざる話と爲すも之に抗論すべうらず我より席を易へて其鋒を避くべし

六。船に乗て渡航中鳴鐘の號報をも待たすして食卓に就くへうらす又決して貪食すへうらす

七。甲板に出てたるとき腰掛の場所塞うり居るときに必ず席を婦人に讓るへし

八。我と談話せんと欲する船客あるときに之と拒み避けすして能き程に應對するを禮とす

九。婦人船中にて知らさる男子と懇意の談話を爲すに不都合なれとも之に向て話しうけ又に種々の質問を爲すに強ち尤むへきにあらす

十。船の役員以下氷火夫等執業中のものに話し掛くへからす

十一。高聲を發して「ボーイ」を呼ふへうらす近來の汽船に

「猶豫なく立ちて之ゐ席を讓るべし」

"Do not hesitate to offer her your seat."

ん大抵各寢室より「ボーイ」部屋ゐ通する傳信線の備ゐるゆへ用事ゐらん之を引くへし

十二。寢室ゐ合客ゐるときん寢室一個ん我ゥ專用なれとも其外の顔洗器等の諸器物ん共用の筈ゆへ決して我物顔ゐ之を使用すへゥらす若し此等をも專用せんと欲せん相當の室料を增し拂ひ全室を借切るの外なきゐり

十三。本船衝突等何事ゐ依らす異變ゐるも必すとも狼狽周章すへゥらす非生の力を以て船客の安全を圖るん船長の義務職掌なるゥゆへ我ん先つ、我身を固め次ゐ手廻り荷物等を固め船ゥゐ船長の指揮を待つへし

十四。友人と共ゐ乘合馬車ゐ乘るとき又ん渡場を渡るときゐ友人我ゥ賃錢をも拂はんとせん餘り之を辭退し

又ハ我却て友人の分とと拂とんなどゝ爭ふへからす友人前ハ進みたる場合あらハ敢てこれハ啄を容れさるを良しとす

第十三章

買物の仕方

一。商店ハ行きて物品を買ふとき我ハ何品を入用なり(I want so and so)おゝゝ押柄ハ言ひ掛くへからす宜しく店の者ハ向ひ何品と見せて下されたし(Show me such and such articles, if you please)と丁寧ハ述ふへし

二。若し種々の物品を見て氣ハ入るものあきときハ彼ハ手數を掛けたることを謝すへし又買物少量なるときハ「僅かのものハ大層手數と掛けて誠ニ氣の毒なり(I am sorry for having troubled you for so trifling a thing)と是れ亦た丁寧ニ申述ふへし

第十四章

書翰

一。凡へて書翰を認むるハ何用ニ拘ハらす眞先きハ用事と明言すへし老練なる新聞記者ハ必ず最初の二三行か又ハ第一節の文句ハて讀者の心を奪ふものなり

二。乱筆ハ書翰を認むるハ極めて失禮のみあらず了解し難き字ある爲め用事の辨せさるか如き不都合あるへきゆへ可成讀易き樣丁寧ハ認むへし

三。郵便切手ハ封筒の右の角ハ張るへし(譯者曰く我國の書翰ハ封筒の表面左の角ハ張るをよしとす)

四。書翰の文言ハ成可平易明了を勉め決して六ケしく認むべからず

五。余り屢外國の語を用ゆへからす如何ふも書生臭くして見苦しきものなり

六。記名ハ可成明了ふ爲すべし間々毫もし字体を爲さずして恰も蝸牛の遺ふたる跡の如き記名を爲すものあれども此等ハ何の益をも爲さゝるのみならず知らざる人ふ書と送るときなどハ多く之が爲ふ行違を生するものなり

七。字を書くこと上手ふあらざるなら、ハ筆紙墨とも最上のものを撰むべし左りとも之が爲めふ別段字体ハ改まることあしと雖ども一寸と立派ふ見ゆるものなり

八。書翰紙ハ必ず汚れあきものを用ひ丁寧ふ折りて封筒ふ入るゝを禮とす

九。簡單なる商用の書翰の外ハ必ず封筒を用ゆべし

十。使を以て書翰を差立る場合ふハ未だ封じ目の干らざる前ふ先方ふ達するが如きことなき樣注意すべし書翰の封じ目濕ふたるハ甚だしき失禮とするあり

十一。友人の親族ふ不幸ありて悔み狀を送るときハ假令ひ死者を知らざるも必ず黑緣の紙を用ふべし

十二。書翰の頭ふハ必ず我が住所を記すべし先方能く之を知るゆへとて略すべからず

十三。書翰を短文ふ認むるときハ却て長文より六ケしきものゆへ決して長文を綴るを自慢ふ思ふへからす

十四。我ゝ用事のみまて人ふ書翰と送り返書を求むる時

分ゐゝ必す切手と封入するを禮とす

十五。書翰なるものゝ我か智あると愚なると綿密なると粗忽あると堪忍深きと輕卒なるとを示めし分る証據物なりと心得ゆへし一たひ之を郵函ゐ投するときゝ回復すへからさるの禍害も之か爲ゐ生すへく限りなき幸福も之か爲ゐ湧くことあるへし故ゐ先つ充分ゐ熟考したる上ゐて筆を執り猶は熟考しつゝ認むへし

第十五章

紳士の心得雜件

一。上流社會の交際ゐ立入り一個の紳士として世を過さんと欲せゝ先つ第一ゐ身体を清潔ゐせさるへからす最も美麗として最も高價なる反物を以て垢付きたる皮膚を包

まんよりゝ寧ろ最も清潔なる身体ゐ最も粗末よして且つ流行後れの衣服を纏ふへし金布の「シャッ」Serge の服必すしも野部なりとせす然れとも手顔身体の垢付きたるゝ此上もあき下賤の習俗と表ゝすものなり

二。且つ身のうちを清潔ゐもることとゝ健康及ひ肉体の快樂ゐ必要なり我か四肢常ゐ健康安全ゐあらすんハ他人ゐ向て滿足の交際を爲さんこと難ゝるへし

三。人の家ゐ行くときゝ必す入口よて靴の裏を刮るへし殊ゐ天氣の惡しき時分ゐとゐゝ能く靴拭ゐて拭ふへし之を怠たるときゝ野部粗暴の人物として人の嗤笑を受くへきなり

四。常ゐ齒を清潔皓白ゐすへし齒の汚れたる程見苦しき

ものゝあし食事毎ゐ楊枝ゐて磨き一日一回齒磨粉を使ふを良しとす

五。呼吸の惡息きゝ人ゐ對して此上もなき失禮とす是れゝ多くゝ口中の掃除行屆うさること又ゝ虫齒あることより起るものゆへ能々注意して齒を清潔ゐすへし尤も惡息腹内より來るものなるときゝ宿ゐ口中の掃除のみゐらす食用を節し胃を補療することと肝要なり

六。手ゐ垢付きたる儘來客ゐ接し又ゝ食卓ゐ就くへからす爪の間ゐ垢の溜り居るゝ見苦しきものゆへ手と洗ふ毎ゑ丁寧ゐ爪垢を取去るへし

七。髮を梳き爪を刮る等總て已ゐ化粧室ゐて爲すへきことを人前ゐて爲すへからす

八。紳士ゝ常ゐ清潔なる「シャツ」を着くへし垢付きたる「シャツ」ゝ諸所縁の切れたる上衣よりも見苦しきものと知るへし

九。座のゐき樣能く掃ひ揣りたる帽を戴き靴ゝ常ゐ黑光りゐ磨き立てたるを穿くへし

十。雜宴會合ゐとの席ゐて時計を見るゝ極めて他ゐ對して失禮なり是れ我れ此席ゐ退屈し時の過ること速うゐらさるを怨むる樣子を示もものとす故ゐ若し時を知りたく思ゝ室の隅又ゝ他室ゐ退き人の氣付かさる樣陰ゐ之を見るへし

十一。結婚の約を爲したる婦人の外ゐゝ決して高價の贈り物を爲すへからす如何ゑも其好意と買ゝんとするもの

、如く卑屈よして且つ失禮なること甚たし又た贈り物を爲す時分ゐゝ仰々しく衷向きゐ之を贈らすしてよろしく間接の手段ゐ依るへし○婦人より紳士ゐ贈り物を爲すゐゝ買ひ求めたる品を以てすへらす手細工物又ゐ油繪などの如き我手ゐ成りたるものを贈るを禮とす

十二。指を噛み手掌を監り合せ溜息をつき又ゐ收納小屋ゐ午睡して眼と覺したる百性の如く口を張り音を起して欠伸を爲すなと都て人の耳障り目障りとなることを爲すへらす此等ゐ下等人民の所爲なれゐ苟も紳士と言ゐるものと爲すへきことゐあらす

十三。人の家ゐ行きたるとき奇麗ある壁ゐ寄りゐゝり壁の張紙と汚すゐと粗暴の擧止をつゝしむへし

十四。宗教政治其他の事ゐ就き說の同しらさる人とゐ可成此等の点ゐて議論することを避け當り障りあき普通の談話と爲すを勉むへし

十五。人若し不當の言語を以て我を怒らせなゝ緘默して之ゐ應せさるを良しとす彼れ粗暴無禮を示すゆゑとて我亦た粗暴無禮を以て之ゐ應するの必要ゐなきあう

十六。會合の場所溜車乘合馬車の内其他何れの處と問ゐす婦人の前ゐて決して喫烟すへらす

十七。凡て人ゐ對するとき我か所行ゐ彼ゐ如何なる感覺と與ふるやゐ深く注意するを肝要とす故ゐ衣服ゐ烟草の香移り居るも差支なき場合ゐあらされゐ喫烟せさるを良しとす又た喫烟の後ゐゐ必す口と漱くへし惡臭き口ゐ

て人を話し掛けることの不都合なる何人も知れる所なるを烟草を以て葱同様忌まれしき臭氣するものと爲す人あるゆゑ能々注意すべきなり

十八。背を椅子の後に寄り掛り椅子の後足にて音を爲すことなられ見苦しきものあり且つ應接の間に備へある椅子に大低後足に横木なきものゆへ椅子を破毀すの危險あり

十九。握手と爲すべき手套なき手を差出すを禮とす但し兩人とも手套を被め居るとき互に之を取除くを待つべ馬鹿らしき杓子儀式なり去りとて婦人又は上位の人手套なきとき決して手套の儘にて握手すべからず故に度々握手を要する如き場合には右の手套を豫め取除きて手に携ふ

るを良しとす○舞踊會にては手套を取除くに及ばず

二十。男女とも殊更に奇怪の衣服を付け又は異樣に髮を結ふなどのことを爲すものは是れ便利の爲めなり節儉の爲めなりと言紛らせども其實多くは衆人の眼を引かんが爲めにすることにて其結果は望み通り衆人の眼を引くに相違なきも人に賞めらるゝことなく却て爪彈きを受くるものなれば必ず此の如き無益のことを爲すべからず

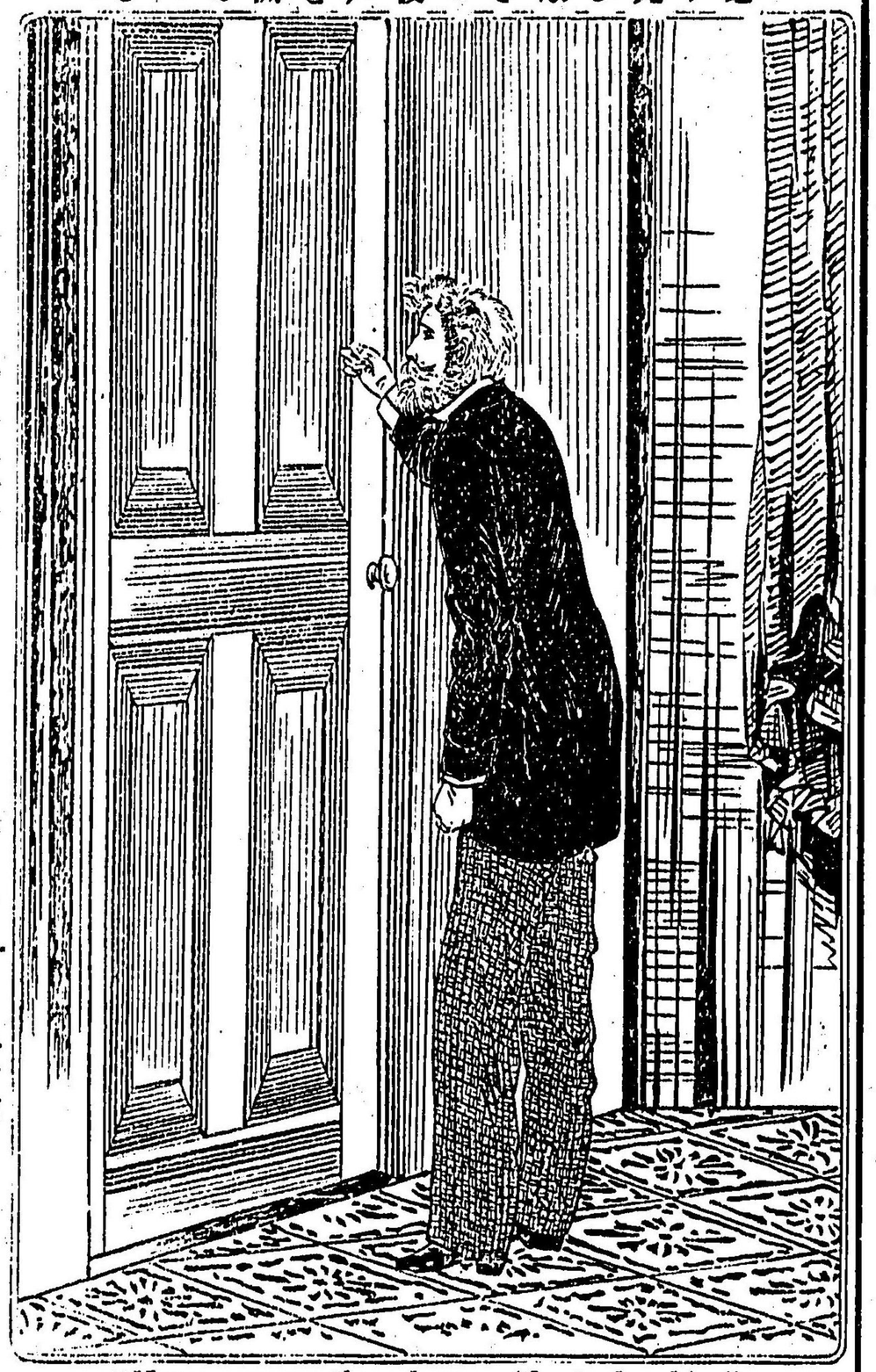
廿一。客として人の家に行るとき後より又た來客ありて主人角張りて起立し之に應對するとき我も亦た立つべし來客婦人なるときは直ちに喫烟を止むべし

廿二。會合の席にては其人々全体の階級に應じて臨機應

變の行を以て成可彼等の爲す所ゐ合すへし右の人々余り禮儀を辨へさる人物ならい我のみ獨り禮儀を蹈みて目立たんよりい寧ろ彼等ゐ打交りて其風を裝ふ方利益あり在昔怜悧なる王あり曾て或る邊鄙の地方ゐ於て貴婦人の盤と受く此婦人珈琲珈を盞皿ゐ移して呑みしかい王い禮式と破りて亦た之ゐ傚へりと云ふ去れい眞の禮儀善美の擧止い時としてい禮儀の規則を破ることと許すのみならす之を破らさるへからさる場合あるを知るへし

廿三。私事を秘するの權利い頗る貴重なるものゐして決して他すり之を侵し破るへからさるなり故ゐ人の私室ゐ入らんとするときゐい必す先つ戸を敲き差支なきや否やを伺ひ「お這入りなさい」(*Come in*)の聲を聞きて後初めて戸を

「必す先づ敲き後戸を開くべし」



"Never open the door without knocking"

開き入るへし假令ひ親子兄弟親友の間柄と雖とも遠慮なく私室ゝ蹈入ることゝ出來さるあり

廿四。行李手函包物書類手紙等ゝ錠の卸ろしあると否と拘ゝらす封の開ちきあると否とゝ拘ゝらす人の秘密品ゝ属するものとして決して之ゝ手を觸るへからす

廿五。又書籍棚を明くること机の上ゝ擴ゝり居る書類を見ることゝ雖とも其主の承諾を經るゝあらされゝ決して之を爲すへからす但し應接の間の机上ゝ在る書籍寫眞函中の寫眞新聞紙の如きゝ來客の閲覧ゝ備へあるものゆへ之と讀み又ゝ見るも不都合なし

廿六。凡へて他人の家ゝ行きてゝ讀むもの手を觸るゝもゝ注意すること肝要なり且つ人の私室ゝ於てゝ殊更なり

廿七。行狀の正しき淑女紳士ゝ内外の別時と場合の別なく常ゝ禮式を乱さゝるものとす父母姉妹兄弟妻子ゝ對して粗忽の擧止を爲し又ゝ自家の食卓暖爐の傍ゝ於て行儀と謹まさる人あらゝ如何なる口實を以て我れゝ紳士なりと自稱するも之を最下等の人物と見做すの外なし

廿八。已ゝ子女成長の後人の尊敬を受け紳士淑女としてもてはやされんことを希ねがゝゝ其幼少の時分より之ゝ善美の品行を教ゆへし王者幼時順從の道を學ゝされゝ長じて配下と從うゆるゝ拙なると等しく禮儀ゝ慣熟せされゝ人の尊敬を受る能ゝさるあり

廿九。總て金錢の取引ゝ親友の間と雖とも必す確實敏りとす

捷を勉むへし○親密の友人ゐ對しても貨金を斷ること無禮ゐわらす我れ如何ゐ富有なるも時の都合ゐよりてゝ貸金を爲す能ゝさる場合あれゝなり

第十六章

婦人の心得雜件

一。年若き婦人ゝ當ゐ無要の畏懼と懶かさる樣注意すへし此畏懼心なるものゝ大切の才幹を痿やして自由の働を爲さしめさるゆへ人の前ゐ於て如何ゐも魯鈍痴愚の如く見ゆるのみならす其實を知らさるもの丶爲めゐゝ押拗振りたる婦人として嗤けり笑ゝるへし抑も婀美總明の婦人ゝわして唯た此欠典あるゝ爲ゐ人の尊敬を受け得さるもの多きゝ誠ゐ嘆息の至ゐこそ

二。市街を散歩するとき又ゝ夜會などゐ於てゝ我れと直接ゐ談話せさる人ゝ皆な我ゝ身体の持扱振りを見て我ゝ品行と教育の度とを判定するものなれゝ勉めて此點ゐ注意することゝ肝要あり容貌如何ゐ婀美あるも輕卒ゐ歩くときゝ大ゐ莊嚴の風を損すへし絶へす我か美貌を自慢する風を示して他人の嘆賞を引かんとする樣子ある婦人ゝ却て他人の冷笑を受くるものあり又頑固ゐして動ゝすべらさる婦人万事角張り過る僻唇を噤める僻兩手を脇腹ゐ釘付ゐせし如く肱を背後ゐ突出し居る僻などある婦人ゝ決して人好きのすることなし

三。歩行するとき肩を嚴ましくし足を遲ぶ毎ゐ兩肱を背後ゐ突出し手先を腰の邊りゐ宛て肱を左右ゐ張り出すこ

と又ゝ忙しき商人の如く手を前後ふ打ち振りあがち歩行する僻などゝ最も見苦しきものなり○餘り歩を短くして歩行するゝ如何ふも品格なし去りとて長歩ふ過るときゝ男々しく粗暴ふ見ゆるものあれゝ總て右の如き挙動ゝふつゝうの極として之を避け最も平易無難ふして最も自然ふ叶なふ態度こそ温雅優婉のものありと心得べし

四。又歩行の時分ふゝ体軀及び頭と俯むけ又ゝ反りうえすことなく正しく直立するを最上とす但し殊更ら此の如く装ふ様子或ゝ押拵の様子を爲すべうらず両手の動うし方ゝ可成平易ふして自然ふ叶ふ様ふし。いそ〳〵しくしとやかなる顔色を爲すべし

五。余り早口又ゝ高聲ふて談話するゝ粗暴野鄙ふ見ゆるものゆへ可成温和ふして且つ低き聲を以て言葉遣ひを爲すへし。

六。着席するとき脚を打交へ又ゝ膝の上ふ脛と載せるなと野鄙の形体と爲すへからす且つ搖々瓢々如何ふもそこふ落付かさる如き様子を爲すへからす去りとて石像を据へたる如く毫しも身動きせぬゝ猶は一層身苦しきものなり

七。毎朝寢床より起き出るときふゝ先つ朝衣(*Morning Gown*)を着け小さきモスリン」の帽を被るへし此身形よてゝ親友又ゝ避け難き至急の用事ある人の外ふゝ決して面接すへからす而して此服ゝ可成速かふ午前の服と着更ゆへし朝衣の儘ふて半日も其處此處ふ漂よひ歩く婦人あれとも遣

ん頗る下品の風習とするなり

八。衣服の事ゐ就てゝ最も眼を凝らし我か体格及ひ皮膚の色ゐ適應する色合を撰むへし若し自ら之を撰定する丈けの眼力なきときゝ決して生意氣ゐ獨斷を以て其衣服を撰み又ゝ之を着こなさんとすることゐかれ漫りゐ之を爲さゝ必す影日向照應の釣合を得すして如何ゐ高價の服を着くるも毫しも身榮へすることゐかるへし

九。我か衣服の美麗ゐると是れ見よがしゐ歩行きなとすることゝゝ人の爪彈を受くるものと心得へし又た殊ゐ深く傲慢剛毅の容貌を誣むへし

十。總て客人ゐ接するときゝ彼として毫しも心慢なく如何ゐも自宅ゐ在るが如く思ゝしむるを第一の目的とすへし唯た口端のみゐて斯く思ゝんことゝ云ふも客人ゝ決して右の感覺を起すものゐわらさるゆへ宜しく眞正朴實の厚情を以て我れゝ一も隔意なきことを示すへし

十一。又客人ゐ彼の來訪我か家事の邪魔ゐなる樣子を見すかさるゝことなく如何ゐも丁度間暇の時分ゐ來合せたる如く取扱ふへし是等の事ゐ就きてゝ我れ他人を訪ふとき家内取込み居りて前後不揃の待遇ゐ逢ふと平易無難ゐして全く我か家ゐ在る思と爲ることを比較して以て參考の具ゐ備ふへし

十二。客人ゐ對して我か室内の飾付器物食事なと粗末ゐして氣の毒ゐる旨を述るゝ最も馬鹿らしく見ゆるものゐれとも自ら之を稱讃たてるなと他の極点ゐ弃るへからす

都て此邊の事ゐ就きて〻何も言〻さるを良しとするなり

十三。客人ゐ無理ゐ食物又〻酒をすゝめ其辭退ゐ拘〻らす皿ゐ盛り添へ或〻杯ゐ注き足す〻失禮の極度とす

十四。客人暇を告け立去る時分ゐ〻假令ひ立去り方余り速や過きると思ふも決して無理ゐ之を引留むへからす勿論其辭去ゐ就き殘念ゐ感する旨を申述ふへしと雖とも其意向ゐ反らい無理留を爲す〻禮儀の當を得さるものあり

十五。縉士ゐ贈り物を爲そゐ〻手細工物又〻油繪の如き已か手ゐ成りたるものを以てすへし決して買ひ調へたる物品を贈るへからす

十六。室内又〻階子段あとを薄暗らくなし置くへからす凡そ世ゐ日光はと廉價あるもの〻なきゆへ惜氣なく之を

使用すへし室内暗きときゝ器物如何ゐ善美あるも圖畫如何ゐ精妙なるも敷物如何ゐ美麗あるも一も其效用を爲すことなし立派ある品物を所持せ〻之をして失れ丈けの用を爲さしむること肝要なりと心得へし

十七。又備付其善美を尽したる客室を〻一年ゐ三度り四度宴會を催ふすときの外〻常ゐ之を閉ち置き平常〻諸器具不完全ゐして且つ健康ゐ有害ある小室ゐ起臥するものあれとも這〻眞の節儉ゐ〻らすして最も卑しく愚なる客嗇とこそ謂ふへし

十八。己か私室の外ゐ〻決して漫ゐ寫眞を掛け散すとなかれ若し人ゐ見せんことを欲せ〻能又〻函ゐ入れ接客室の机上ゐ置くへし

十九。客として人の家ふ行くときゝ可成其家風ふ從ふことを勤むべし即ち食事就寢等の時刻を察し之ふ從ふて動作すべし

二十。已が部屋を清潔ふし衣類化粧道具等を取乱さず整然其所を得せしむべし。充分の召使わらざる婦人ゝ自ら其臥床を整理し其他可成丈け自ら其用を辨じ且つ力のわらん限りゝ家内全体の用事と達すべし

廿一。婢僕を親切ふ支配し同時ふ嚴格の自重を示をべし決して之として狎れ近ろづりしむるなり多言することなりれ彼等と雜談と爲すなかれ彼等と物爭ひを爲すなかれ之を戒め責むるの必要わらば恩威を以て靜かふ之と爲すべし且つ他人の目前ふ於て決して其過失を責むべうら

す假令ひ秘造の陶器を破毀すことあるも來客の見る前ふて之を罵り責るゝ頗る野鄙の所爲なりと心得べし

廿二。主婦の器量ゝ其婢僕の品行ふ依て測り知らるゝものなれが常ふ温和を旨とし禮儀を守らしめ客人の外套を脱着すると手傳ふこと及び戸を開くふ遲々せざること等を教へ置くべし

廿三。婢僕をして余り穢さくろしき身形又ゝ余り立派過ぎる身形を爲さしむることとなりれ我前ふ於て互ふ談話せしむることなりれ我れ之と呼ひたるとき手勢又ゝ不注意なる言葉ふて返答せしむるかりれ

廿四。召使一名なるときゝ之ふ就て話し又ゝ之を呼ぶふ其名を以てすへし若し數名の召使あるときゝ之ふ就て話

すゐゝ乳母仲働料理番掃除人等其役名を用ゆるも可あれ
とも之を呼ふゝ必す其名を以てすへし

廿五。 來客ゑ向ふて決して我か召使の不都合を彼是れ話
すへゝらす

廿六。 夜會なとゐて歌ひ又ゝ舞ふことを故あく辞退すへ
ゝらす若し人ゐ求めらるゝときゝ直ちゐ之ゐ從ふへし歌
ふこと能とさるゝ又ゝ舞ふことを欲せさるゐ於てゝ容儀
を正ふして明白ゐ其旨を述へ斷るへし歌ひ始めたるとき
ゝ長く續けすして一二度歌ふて之を止め他人として歌ふ
機會と得せしむへし

廿七。 親密の友人ゐ向ふて話すときゐゐらされゝ「私の良
人」(My husband)なる言葉を用ゆへからす必す其姓を呼ひ何某

氏(Mr. so and so)と言ふへし

廿八。 人の訪ひ來りたるとき針仕事を爲し居らゝ直ちゐ
之と止め來客の求めゐゐらされゝ再ひ之ゐ手を就くへか
らす尤も入魂の友人なるときゝ我より許を乞ひ再ひ始む
るも失禮とせす

廿九。 正禮の訪問を爲す時分ゐゝ小兒又ゝ犬と伴ふへか
らす正禮ゐゐらさる訪問と雖とも決して犬を客室ゐ入ら
しむへからす且つ小兒も乳母と共ゐ室外ゐ留むへし

三十。 婦人他の婦人又ゝ紹介さるゝときゝ握手す
るゐ及ゝも唯た靜かゐ腰を屈め默禮を爲すへし親密の友
人ゐ出逢ふときゝ握手を爲し又ゝ頬ゑ接吻して相祝すへ
し

卅一。良人又い情郎の外い決して唇ゐ接吻せしむるあかれ即ち良人情郎ゐい唇を出たし朋友ゐい頬を出たし紳士ゐい手と出たして接吻せしむるを通則とするなり

卅二。寺院劇場夜會其他都て遊戯の場所ゐていい必す手套を穿むへし但し握手の爲め之を取除くゐ及いす手套い恰好よく手ゐ合ふたるものを用ゆへし

卅三。如何ゐ學識才智ある也餘り自慢らしく人ゐ之を示さゝるをよしとす稱讃さるゝよりい却て嗤笑を受るものなり

卅四。供人の用意なくして晩景まて他人の家ゐ留るへらす總て人を訪はんとするとき談話手間取りて夕刻ゐ及ふゐらんと思いゝ僕又い何人ゐても我ゝ家内の男子を伴

ゐひ行くか或い迎ひゐ來るへき時刻を約束し置くへし右の用意ゐくして万一不得止事情より晩景まて留りたるとき先方ゐて人を出たし我を送らんとせい其親切を謝し之ゐ伴ない歸るへし

卅五。旅行中自ら名乘りて我れゐ近つくものゐらい宜しく禮儀を正ふして之ゐ應接すへし彼若し直打ゐる紳士ゐらい必す我か品行の正しきゐ感すへく万一紳士ゐらさるときい我れゐ犯す可らさるの品格ゐるゆへ彼れ決して不愉快を我れゐ與ふることと能はさるへし○旅行の途上舟車中の交際い其場限りゐして消滅するものと心得へし

歐米禮式終

明治十九年九月十三日版權免許
同　年十月　出版

定價四拾錢

大分縣士族
譯述者　首藤新三
麹町區下六番町
十三番地寄留

山梨縣平民
譯述者　兒玉利庸
本郷區湯嶋新花町
三十四番地寄留

愛媛縣士族
出版人　西川半次郎
神田區中猿樂町
七番地寄留

發兌書肆　日本橋區通壹丁目　北畠茂兵衛

賣　京橋區銀座四丁目　博聞社

捌　日本橋區通三丁目　丸善書店

所　神田區小川町　中西屋邦太

大日本私立衛生會藏書
四八四
三架
七七號
一

特 23
70

011971-000-2

特23-70

欧米礼式

チェスターフィールド/著

M19
AAG-0018